千葉功著

『旧外交の形成
日本外交一九〇〇～一九一九』

内田啓一

厚い（熱い）研究

本書は歴史文化学科の千葉功氏によって記された書である。著者は日本近代史を専攻しており、特に外交史を専門に研究されている。かつて東京大学に提出した博士論文に加筆し、本書にしたのであるという。

まず、本書を手に取った時の感想は、「厚い」という点が第一印象である。なにを隠そう、千葉氏と私は昭和女子大学に勤務は同期である。もちろん年齢は違う。同期とはいえ、私は怠惰、千葉氏は勤勉という大きな違いがある。この誰にでも解る差が本書の厚さである。

本の帯には「日本が「旧外交」に習熟していった過程を二十世紀初頭の国際情勢とともに精緻に捉え、その時代の持つ意味を明らかにする」と謳われているが、近代になるとそれだけ多種多彩な事件や動向がみられるということだろう。しかも

2008年4月25日発行
勁草書房
A5判　608頁
定価　5700円（本体）

一九〇〇年から一九一九年と二十年間の短い期間を対象とした研究である。私のように専門を日本美術史としていると、二十年間ではほとんど何も変わらない。という訳で、専門とする分野が千葉氏とはまったく違う故、立ち入った書評は行いがたい。よって、本書の内容を簡潔に要約したうえで、最後に感想を述べることで責を塞ぐことにしたい。

本書の概要

構成は第Ⅰ部～第Ⅴ部の五部である。順をおって見ていこう。

第Ⅰ部では、日本の外務省が第一次世界大戦の末期から戦後にかけて、外務省は、枢密院を除く陸軍や議会など他の機関からの外交政策への介入を一応排除することに成功したという。これは、一八九三年に導入された職業外交官採用制度の改革が外務省の頂点にまで行き渡るようになり、「霞ヶ関外交」を支える特別官意識を育むことになった。自律性は獲得し、組織は急速に肥大化するが、省内の意志を統一する機関は欠如したままであり、外交政策をめぐる陸軍との対立など、外交の真の統一を欠いたまま、戦間期を迎える経緯が説かれている。自律を獲得した外務省は、日本外交の閉鎖性を産み出し、助長することになったらしい。

第Ⅱ部は日露戦争の原因を追及しており、言うところの「多角的同盟・協商網」の構築に失敗し、日本とロシアが戦争になったとみている。日本外交を従前とは異なった視点から論じており、ここでは従来の日露開戦原因の通説的説明が要約され、「研究が開始された時期の同時代的発想に強く影響された独特の問題設定」にもとづいて行われた論争を解決するために持ち出された説明であるとし、日露開戦における伝統的解釈を塗り替えんとする意気込みで展開された論争的な内容となっている。

日露戦争以後の状況を説明した第Ⅲ部では、い

ったん失敗した「多角的同盟・協商網」の構築（日英同盟、日露協商、日仏協商といった日英露仏との四国協商）に成功しながら、直後に起きた、孫文等による辛亥革命や政権交代により対日政策を変化させたアメリカの存在などで動揺してしまったという。成功したかと思うと、動揺に見舞われ、中国ナショナリズムの台頭やアメリカの東アジア外交への登場など様々の要素が重合し、これらに対応しきれなかった日本外交の難しさを物語っている。

続く第Ⅳ部では、第一次世界大戦によって、動揺を覆い隠されていた「多角的同盟・協商網」が第一次世界大戦直後に一気に崩壊する様子を克明に描き出している。たとえば元老山県有朋は「石井・ランシング協定」（一九一七）の締結を喜び、帰朝した使節石井に握手を求めたほどであった。しかし協定成立のまさに五日目にロシア革命が勃発し、日本の求めていた「多角的同盟・協商網」の一角が崩壊し始めるのである。これに象徴される事態は、千葉氏が「あとがき」で述べる日本外交の「悲劇」にあたるのであろう。

最後の第Ⅴ部はそれまでの四部とはやや趣を異ならせている。第Ⅴ部では、国際紛争を国際裁判で裁くことを義務づけた条約の締結が流行するも、日本はある国際裁判（家屋税事件）の敗訴の経験から、まったくもって消極的であったらしい。これはⅠ～Ⅳの裏返しとしても解釈できる。言い換えれば千葉氏の言うところの「多角的同盟・協商網」の締結がうまくいけばいくほど、日本は国際裁判に対し消極的になることを意味した。確かにいまだに日本が紛争を国際裁判にもちこんだということを聞かないが、その淵源がここにあるのかもしれず、興味深い。

本書の特徴と意義

本書を一読して、いや、そんな簡単な一読は無理で、何度も読み返す箇所があったが、それはともかく、史料を多用している姿勢が印象的である。モノから考察し、結論を導き出すという基本的姿勢である。史料館や文書館を歩きまわってネタを収集し、着実な成果をあげたのである。従前に注目されていなかった史料に着目し、いろいろな史実を掘り起こしたこと自体にも意味があるのだろう。

また、そのためか注の量も多い。二段組でなんと百ページ近くもある。これも千葉氏がエネルギッシュである証拠である。失礼をかえりみず言うが、研究者もそれ相応の年齢になると、論文を書いても注が少なくなる。面倒になるのか、能力が落ちてしまうのか解らないが、「注」に神経が注がれている論文ほど好感が持てるものはない。

内容の方では、本書全体として、日本が「旧外交」に習熟した瞬間、世界では「新外交」の時代に突入した「悲劇」を強調している。言い換えれば、日本が世界のルールを一生懸命に修得したとたんに、世界は一歩先に進んでしまっていたのであった。従来では、この時期に日本が世界の舞台に躍り出て、仲間入りしたように言われているが、なんとも小気味よく日本外交を叩き斬っているのが本書である。ひるがえってみると、日本の外交が世界に遅れがちであるのは現在も変わりあるまい。その点からも、現在の日本を考え直してみる上でも、一九〇〇～一九一九年の時代における日本外交の動きを考え直すことは意義深いことと思われる。

簡単な書評となってしまったが、これにて怠惰な私の感想文を終える。勤勉な千葉氏の今後にも大いに期待したい。

（うちだ　けいいち　歴史文化学科）